



DAS KAPITAL

2022年3月の学習会案内 第37回「資本論を読む会」

日時：3月30日（水）午後6時30分
Zoomで開催しています

「第13章 第3節 機械経営が労働者に及ぼす第一次的影響」(P361～)

※第2節を討論してから第3節に入る。

参加者メンバーの固定化も進んでいますね。2月28日の「資本論を読む会」には、い

つも通り10人が参加(地方は3人)。「第1節・機械装置の発達」の残り(336pから)を討論してから「第2節・生産物に対する機械装置の価値移転」のレポートを受けた段階で時間切れでした。次回は、第2節の討論をしてから「第3節・機械経営が労働者に及ぼす第一次的影響」に入ります。優れて現代的なテーマですね。「機械化・合理化と労働者への搾取」がマルクスによってどう把握し分析されていたのか、あらためて勉強したいと思います。

次回からも初参加の方歓迎します!別途お送りするZoomアドレスからお入りください。

☆「資本論を読む会」の最初からの資料は下記ホームページでご覧になれます。

◎ <http://socialistho.cafe.coocan.jp/>「資本論を読む会」オープン・コーナーにあります。

レポーターから--Tak

第四編 相対的剰余価値の生産 第十三章 機械装置と大工業 第一節 機械装置の発達 336p6L～

①**機械協業**：?マニュファクチュアの多数手工業者の「工場内分業」を行なう「同一の作業機」が複数配置され、「機械による単純な協業」が再現される。?「一つの共通の原動機」から、配力機構と諸作業機は「同時に一様の刺激」を受け、「技術的統一」が実現する(人間の協業は、「完全」には統一されない)。

②**機械体系**：?「種類が違う一連の道具機」を「労働対象」が通過する。マニュファクチュア分業が「部分作業機の組み合わせ」で再現。?「主観的な(人間労働基準の)分業原理」は機械生産ではなくなり、「客観的(労働手段だけの)分業原理」となる。

機械協業でも機械体系でも、「自動的な原動機」での運転により「人間の助力なし」に「人間の付き添い」を要するにすぎなくなる時、「機械装置の自動的体系」が生ずる。

機械経営は手工業やマニュファクチュアという「異質な基礎」の上に自然発生的に生じた。しかし、機械の一定の発展がそれを転覆して、自身の生産様式に適合する新たな基礎(機械制大工業)を作った。

機械に自然発生する、①型の拡大、②最初の手工業の原型から離れ機械に最適な仕様、③より困難な材料の使用(木から鉄)、等の諸課題は、人的限界のためマニュファクチュアでは解決できなくなった。

1産業の変革は関連する他産業の変革を引き起こす。またことに、社会的生産過程の「一般的条件」(インフラ)である「交通運輸機関」の革命を必要とさせ、河川汽船・鉄道・海洋汽船・電信の体系へと、漸次に大工業の生産様式に適合させられた。

今や、様々な加工が必要な「大量の鉄」は、それ自体が巨大な機械を必要とし、その機械を作ることはマニュファクチュアではできなくなった。

「機械による機械製造」の最も本質的な条件は、①各種の出力が可能、②完全に制御することができる動力機、だったが、それはすでに蒸気機関として存在した。

労働手段が機械になるで、「物的存在様式」は、「自然力(蒸気・ガスリン等)」で「人間力」に代え(動力機)、「自然科学の応用(科学技術)」で「経験的熟練」(道具機)に変えることを必然とする。

マニュファクチュアでは、「社会的労働過程の構成」は「純主観的(人間の構成)」で「部分労働者の組み合わせ(人的分業)」だが、機械制大工業では、労働者(主観)に対して、既成の物的生産条件として存在する「純(全く)客観的」な生産有機体を持つことになる。

マニュファクチュアの「純主観的」単純協業や分業では、「社会化された労働」による「個別労働者」の駆逐は「偶然的」だが、機械装置は「直接に社会化された労働」でのみ機能する。このようにして、「労働過程の協業的性格」は、労働手段そのものの性質によって「技術的必然性」となる。